

αMプロジェクト2022

判断の尺度

Have something that defines my judgment

vol. 4 大木裕之 | tiger/needle とらさんの墨汁針

vol. 4 Hiroyuki Oki: tiger/needle

ゲストキュレーター: 千葉真智子 (豊田市美術館学芸員)

Guest Curator: Machiko Chiba (Curator, Toyota Municipal Museum of Art)

2022年10月29日(土)～12月17日(土)／23日(金)

展覧会は12月17日(土)で終了し、12月20日(火)～12月23日(金)は公開で搬出作業を行います。

オープニングパーティ等はありません。

12:30～19:00※ 日月祝休 入場無料

会場: gallery αM

〒101-0031 東京都千代田区東神田1-2-11アガタ竹澤ビルB1F

tel: 03-5829-9109 fax: 03-5829-9166

<https://gallery-alpham.com>



※新型コロナウイルスの影響により、開催日時の変更や入場制限をする場合がございますので、お越しいたぐ際に Web サイト、SNS 等で最新情報をご確認ください。
またご来廊の際には必ずマスクを着用いただき、ご連絡先の記入等へのご協力をお願いいたします。体調の優れない方はご来廊をお控えくださいますようお願い申し上げます。

私の総体／個と社会の不可分性

社会的、政治的であるとは、どのような態度を指しているのだろうか。そして芸術において社会的、政治的であるとは、どのような造形をして成立し得るといえるのだろうか。

大木さんの映像作品に映し出されるのは、ごく普通の人たちの——それは10代の一時期という凝縮された特別な時間のなかにある高校生であり、そうした時期も過ぎた大人たちであり、またその目撃者である大木さん自身である——、ごくごく日常の断片というべきものである。しかし、その時々々の光や風景を含んだ映像の連なりは、いわゆる「意識の流れ」ともいえるべき流動する大きな全体から成っていて、そこには独特の眩しさがある。

高知、東京、岡山と複数の拠点をもち、移動を繰り返しながら制作し、複数の展示やパフォーマンスを行う。その日の出来事やその時々々に感受し、想起したことを何十年にもわたり、メモに取り、言葉に留め続ける。こうして記録され、記憶された様々な出来事や想念は、長い年月のなかで醸成され、作品のなかに幽霊のように回帰、出現し、連想の糸を結ぶ。部分である個々の作品に、過去を含む総体が流れ込んでいく。

大文字の「建築」から離れ、「映画」という方法を手にした大木さんは、日常を暮らす人々とそれらを取り囲む場や関係の全体を考えることで、より深く建築的なものに関わり続けているともいえるだろう。建築とは、そもそも個人と社会の全体を必然的に含むものである。

社会的、政治的であることを標榜することなく始まった制作行為や造形行為が社会や政治に接続する。過去の出来事も、いま自分がとった行動にも何がしかの必然性がある（と考える）。「個人的であるということとはすごく社会的」なことである。

創造と社会の結び目。

千葉真智子

追記

様々な時間や場所、出来事が往来する大木さんの作品は、会期中の大木さんの経験や想起に応じて形を変えていくことになります。そして12月17日の会期終了後、23日に搬出が完了するまでの行為とそれに伴って変化する会場の有り様もまた、大木さん（の作品）の大事な要素であり、多くの方に経験として立ち会っていただけたらと思います。

●大木裕之（おおき・ひろゆき）

1964年東京生まれ。東京大学工学部建築学科在学中の80年代前半より映像制作を始め、89年～北海道松前町を中心にした映像作品群〈松前君シリーズ〉を開始、96年に『HEAVEN-6-BOX』（1995）が第46回ベルリン国際映画祭NETPAC賞を受賞。その表現活動は映像制作のみに留まらず、ドローイング、インスタレーション、パフォーマンスにまで及ぶ。カメラを手に世界各地を旅し、膨大なイメージを次々に重ねていく独特で詩的な映像表現は国内外から高い評価を受け、国際展にも数多く参加している。主な展覧会に「M+ Moving Image Collection」M+（香港、2021）、「あいちトリエンナーレ：虹のキャラヴァンサライ 創造する人間の旅」（2016）、「歴史する！ Doing History!」福岡市美術館（2016）、「ライフ＝ワーク」広島市現代美術館（2015）、「Out of the Ordinary」ロサンゼルス現代美術館（アメリカ、2007）、「シャルジャ・ピエンナーレ」（アラブ首長国連邦、2007）、「夏への扉—マイクロポップの時代」水戸芸術館（茨城、2007）、「六本木クロッシング」森美術館（東京、2004）、「How Latitudes Become Forms」ウォーカーアートセンター（アメリカ、2003）など。



《LTBTIQ》
2017年 | HDビデオ、6分41秒



《色目》
1992年 | 16mmフィルム(カラー、サイレント)、7分



《心の中》
1998年 | 16mmフィルム、89分

「判断の尺度」

千葉真智子（豊田市美術館学芸員）

全ては平等に。その呼びかけは、平等であるために過度なまでの正しさを私たちに求める。しかし正しさとはそもそも何だろう。それはときに一つの原理へと向かい、小さな個別の差異を見えなくしてしまうだろう。いうまでもなく、平等であることは同じであることを意味しない。同じでないものを等しいというとき、私たちは尺度を一つにして、個々についてのそれぞれの評価や判断を手放さなければならないのだろうか。そうではなく正しさを超えて区別し、言葉を与えようとする。それには、私たちが手垢のついた言葉自体を作り直す必要がある。美術と呼ばれるものが少なくとも造形に関わる行為であるならば、その造形＝言葉を練り、抛り所にする事で、尺度自体について問い、判断自体を創造的に作ることはできないだろうか。独りよがりになることなく、普遍的な外部をもつものとして。

私の判断が普遍性をもつかどうかは他者の判断に賭されている。私の判断を支えるものとして、私の外部を召喚すること。そこで想定されるのは、予め同じ尺度を持たないもの、置き換えできないものであり、その困難な対話が新たな言葉と批評を開く可能性の種となる。

1年の企画をとおして、それぞれの作家とともに判断の尺度について考えてみたい。これまでの尺度を手放して作り直す。この造形＝言葉による判断は、世界を測る尺度となる。だからこの行為は、静かに深く政治的でもある。

●千葉真智子（ちば・まちこ）

豊田市美術館学芸員。愛知県生まれ。企画担当した主な展覧会に「寺内曜子 パンゲア」豊田市美術館（愛知、2021）、「岡崎乾二郎視覚のカイソウ」豊田市美術館（愛知、2019）、「切断してみる。 —二人の耕平」豊田市美術館（愛知、2017）、「遠隔同化 二人の耕平」「切断」のち「同化」KYOTO ART HOSTEL kumagusuku（京都、2016-2017）、「ほんとのうへのツクリゴト」岡崎市日本多忠次邸（愛知、2015）、「ユーモアと飛躍 そこにふれる」岡崎市美術博物館（愛知、2013）など。また、デザイン・装飾芸術に関する展覧会も企画。今年度、「交歓するモダン 機能と装飾のポリフォニー」（豊田市美術館）を担当。

■取材、掲載用写真の貸出など、ご質問がございましたら下記までお問い合わせ下さい。■

gallery αM ギャラリーアルファエム

e-mail: alpham@musabi.ac.jp / tel:03-5829-9109 / fax:03-5829-9166

武蔵野美術大学 大学企画グループ 社会連携チーム(ギャラリー不在時)

tel:042-342-7945 / fax:042-342-6087